

はじめに

江戸時代、大名家にとって家を存続させることは重要な課題でした。このことから、嫡子の存在はもちろん、嫡子が急逝した場合に新たに嫡子となる庶子の存在も、大きな意味をもっていました。また、自家を相続しない庶子も養子として他家を相続することや、姫が他家へ嫁ぐことは、大名家が有していた家関係の維持に寄与したことから、嫡子以外の子どもも大名家の家を存立させていくために必要でした。そのため、大名家では子どもの健康な成長を願い儀礼が行われていました。その他、成長に伴い行われる儀礼や行事も多くあり、子どもはこれらを経て、最終的に元服を終えると成人とみなされました。

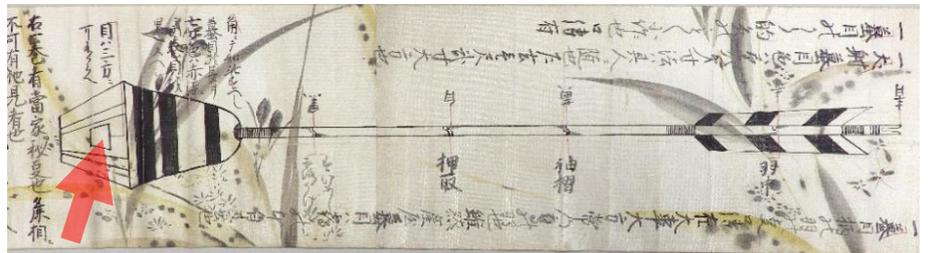
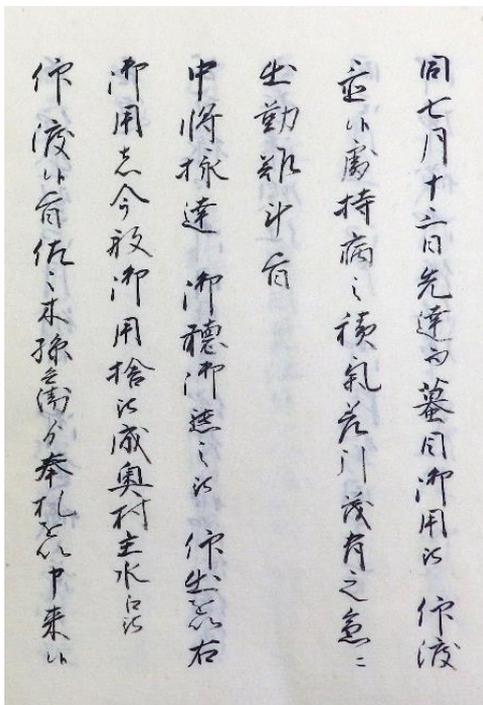
今回の展示では、前田家子女の誕生から元服に至るまでの人生儀礼や諸行事について、古文書・絵図からみていきます。

ひきめ

1. 墓目・名付

ここでは、子どもが誕生してから7日目（七夜）までに行われた儀式などをみていきます。

まず、子どもが誕生すると、七夜までに墓目と呼ばれる儀式が行われます。墓目とは、鏑矢の一種のことであり、古くからその矢を射ることで鳴る音響が妖魔降伏などに効果があると信仰されていたことから、出産や病気の時に墓目を射る儀式が行われていました。前田家では、子どもが誕生すると年寄奥村宗家が基本的に墓目役を勤めていましたが、宗家が勤められない時には支家が勤めました。この儀式の後、多くの場合、七夜までに子どもの名付も行われました。

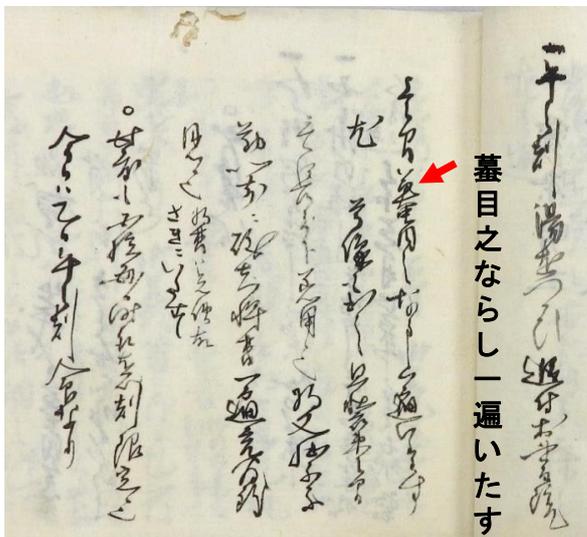


「墓目図」(16.81-587)

墓目の矢を描いた図。矢印の箇所穴が空いており、弓を射るとそこに空気が入り独特の音が鳴ります。

「奥村家譜」(16.31-81)

天明2年（1782）7月に10代重教の子として誕生した齊広（後の12代）の事例では、当初は奥村尚寛（奥村宗家10代）が墓目役を勤める予定でしたが、持病の癩気（内蔵疾患）のため同役を勤めることが困難となり、代わりに奥村隆振（奥村支家10代）が勤めました。

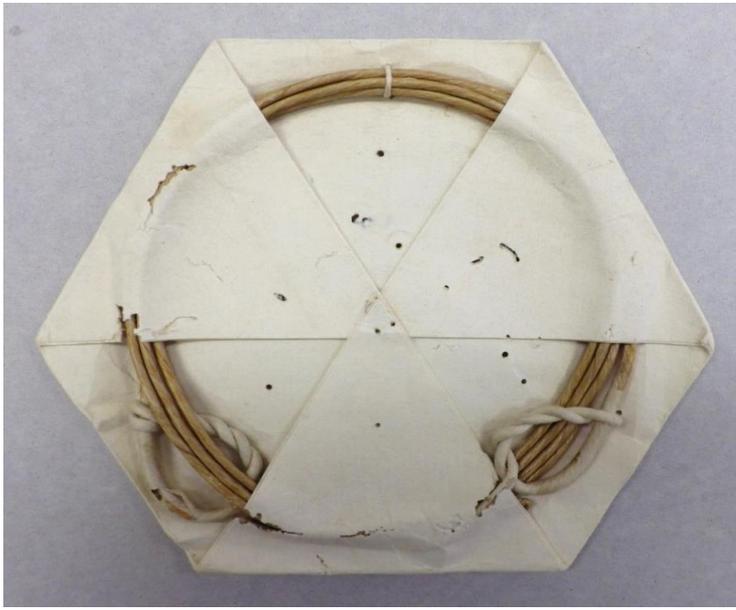


「墓目覚書」(094.0-74①)



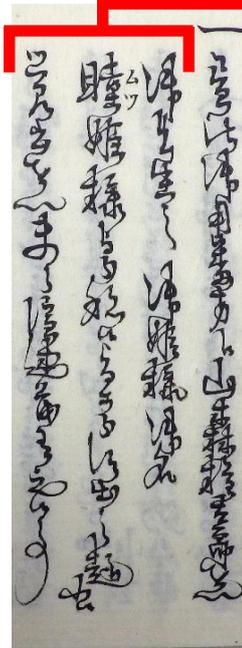
「金府大絵図」(大1005)

12代齊広の子直姫の墓目を記した史料。墓目役は、奥村栄実（奥村宗家11代）が勤めました。栄実にとってこれが初めての墓目の儀式でしたので、事前に波着寺（前田家の祈禱寺。現在の石引2丁目）で「ならし」（練習）を行いました。



「姫君様御産用留附公儀御産御祝式品々」(16.16-19⑨)

墓目の儀式が終わると、基本的に弓矢が献上されました。しかし、13代齊泰夫人溶姫（11代将軍家斉の子）のように将軍家に関係する者が出産する場合、将軍家の先例に従い、弓弦が献上されることがありました。この弓弦は、14代慶寧（母溶姫）の墓目の後に年寄奥村栄実が献上したものの控えです。



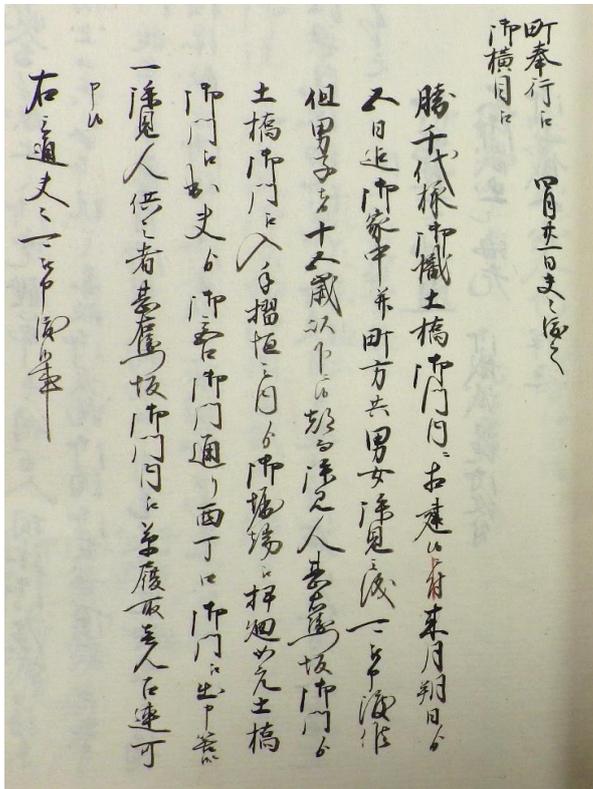
「墓目被仰付候始終之覚等」(094.0-41⑤)

14代慶寧の子睦姫は、安政元年（1854）11月1日金沢で誕生しました。そして11月8日、「睦姫（むつひめ）」と名前が決定し、公表されました。

御出生之御姫様御名
睦姫様与被称候旨等被仰出之趣、右
覚書を以夫々演述も有之候事

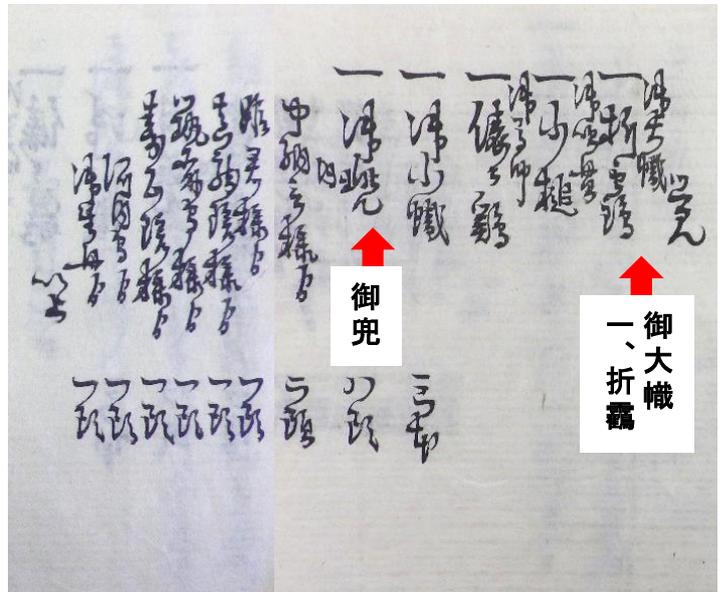
2. 端午の節句

端午の節句には、金沢城内に幟が建てられ、家臣・町人の見物が許されていました。ここでは、その事例をみていきます。



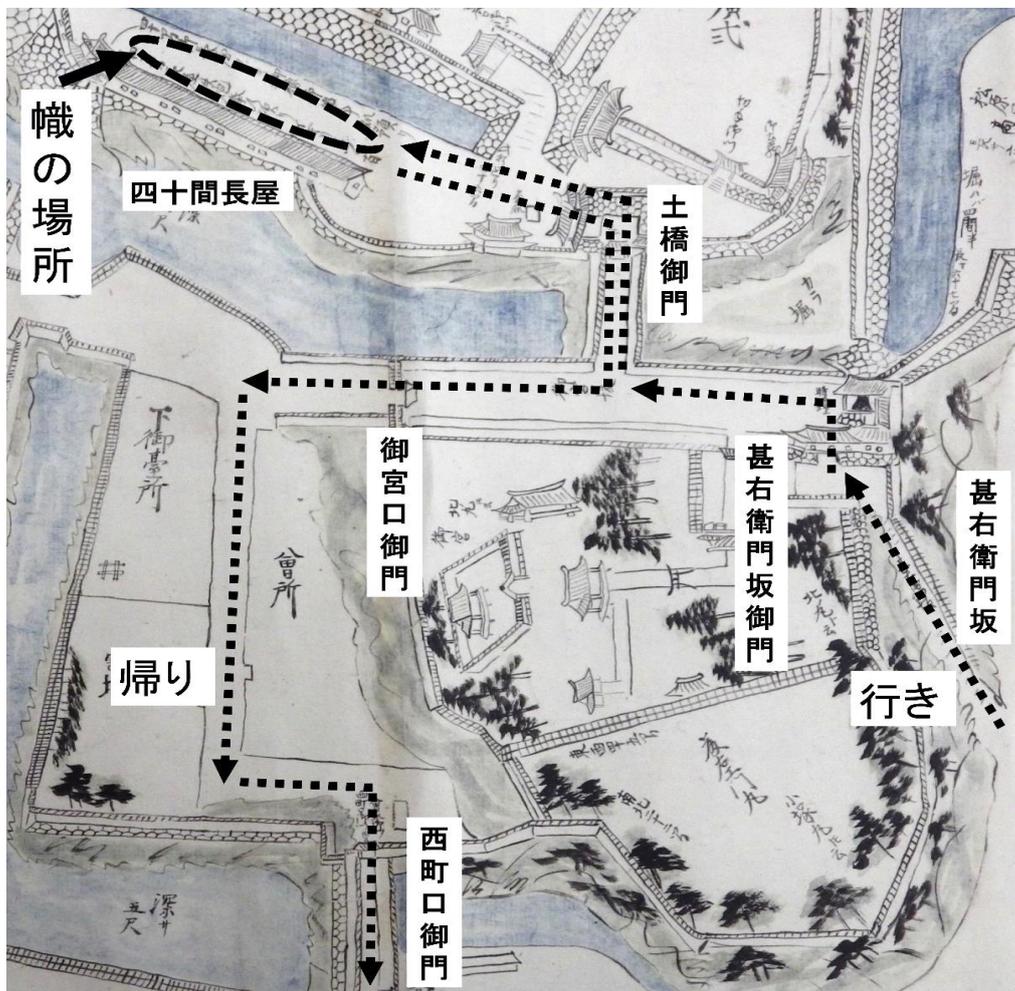
「勝千代様御年表」(16.12-122①)

勝千代（12代齊広の子。後の13代齊泰）の初節句の時には、土橋御門内（四十間長屋前）に幟が建てられ、家臣や町人が見物したようです。男女の拝見が許されていましたが、男性は15歳以下の者と制限されていました。また、拝見人は、全て甚右衛門坂御門→土橋御門→手摺垣之内→御堀端を通り、再び土橋御門まで戻り、御宮口御門→西町口御門から出るようにとされていました（次頁図）。



「墓目被仰付候始終之覚等」(094.0-41⑥)

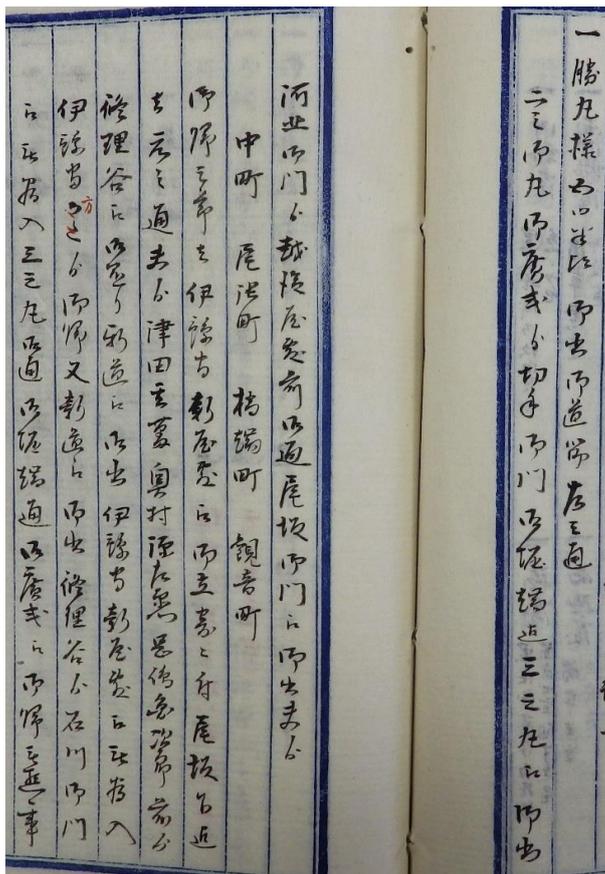
茂松（13代齊泰の子。後の13代富山藩主利同）の初節句に伴い、献上された品々を記している。幟や兜などが献上されており、幟は「折鶴」（おりづる）と書かれていることから、折鶴が描かれた幟であったことがわかります。おそらく、この献上された幟は、初節句の際に城内に建てられたのではないかと考えられます。



「金沢城絵図」(096.0-277)

3. 宮参

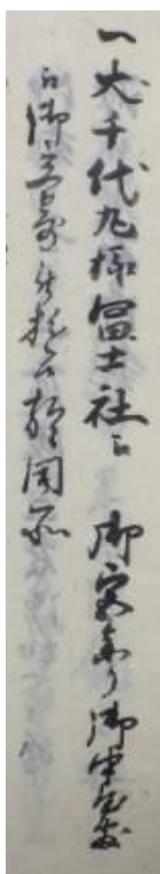
宮参とは、子どもの誕生後に産土神へ参詣する行事のことです。前田家では、3歳頃（生後1ヶ月の場合もある）に行っており、金沢では卯辰観音院、江戸では駒込の富士社へ参詣しました。また、下の史料でみられるように、参詣後は金沢では奥村宗家屋敷（現金沢医療センター）、江戸では中屋敷などに立ち寄ることが慣例化していました。



〔左〕「勝丸様御宮参二付諸事伺等之留」
(16.16-31)

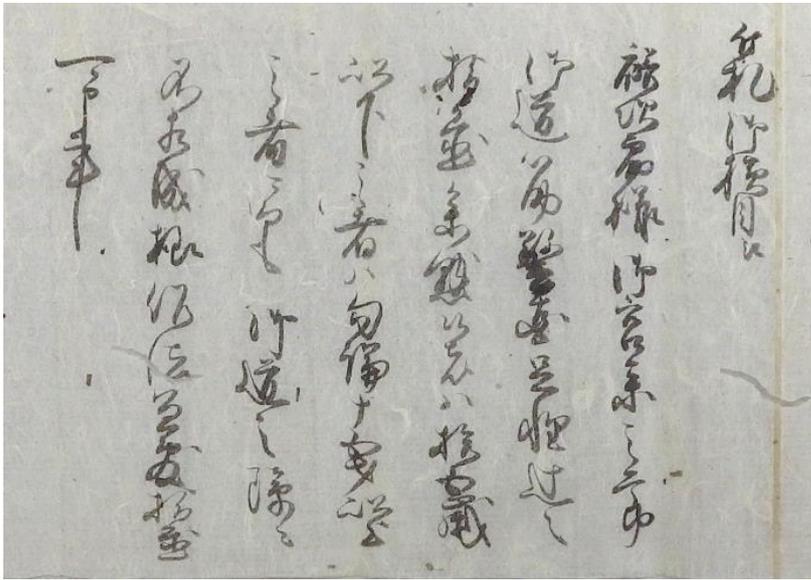
勝丸（6代吉徳の子。後の7代宗辰）の卯辰観音院への宮参を記した史料。勝丸は、享保12年（1727）9月6日に3歳で卯辰観音院へ参詣しました。

経路は行きが、金沢城二之丸広式→切手御門→御堀端→三之丸→河北御門→越後屋敷前→尾坂御門→中町→尾張町→橋場町→観音院、帰りが観音院→橋場町→尾張町→中町→尾坂→津田玄蕃屋敷前→奥村源左衛門屋敷前→岡嶋円次郎屋敷前→修理谷→新道→奥村伊予守新屋敷（立ち寄る）→新道→修理谷→石川御門→三之丸→御堀端通→御広式でした。



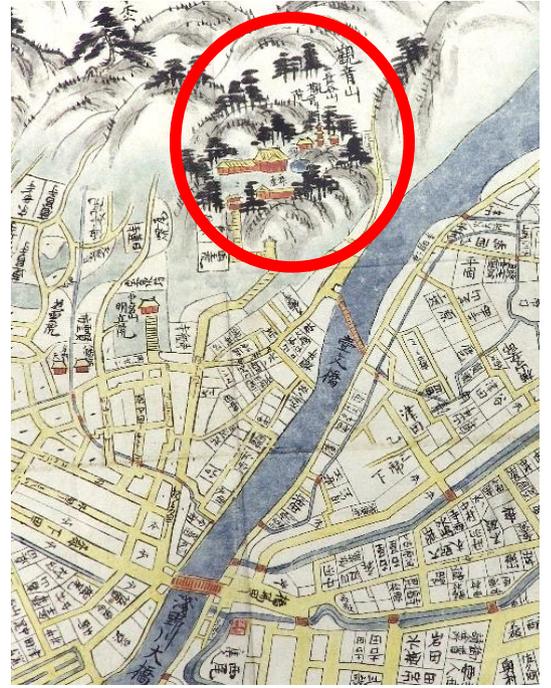
〔右〕「犬千代様御宮参御祝方」(16.16-40)

天保元年（1830）9月22日に、犬千代（後の14代慶寧。当時1歳）の江戸駒込の富士社への参詣を記した史料。前田家の子どもが江戸で宮参をする際は、駒込の富士社へ参詣していました。



「裕次郎様御宮参一件」(16.16-38①)

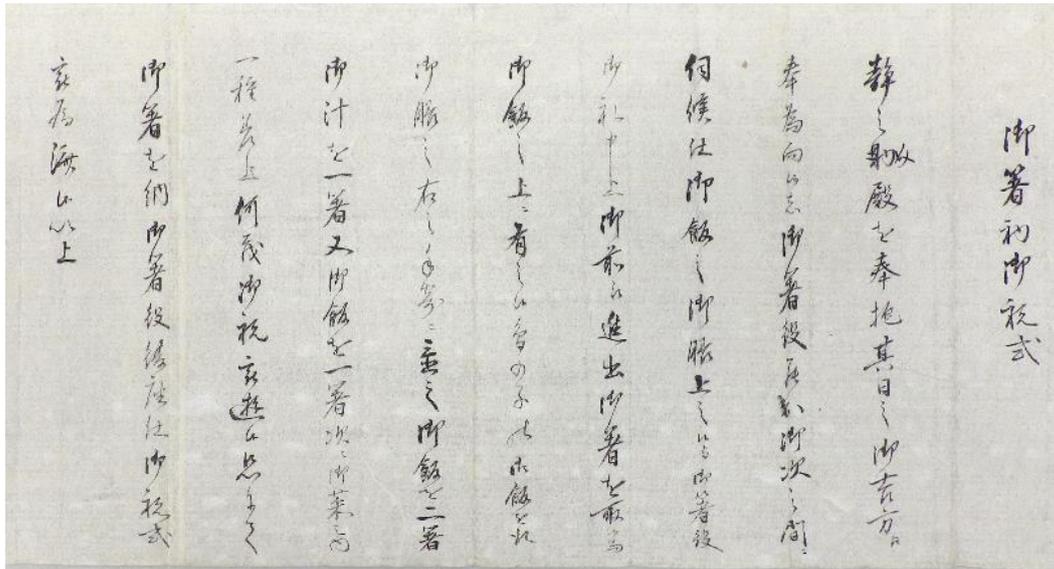
文化元年(1804)9月13日、裕次郎(10代治脩の子。後に11代齊広の養子)が宮参のため卯辰観音院へ参詣した際に出された達しの写し。宮参の時には、警護のため道辻に足輕を置いていたことや、行列の通行の妨げにならないようにという達しが出されていたことがわかります。



「金府大絵図」(大1005)

4. 箸初

箸初とは、一般的には生後120日に行う儀式で、子どもに食事を食べさせる(実際には食べさせるまね)祝いの儀式のことをいいます。前田家では、生後3~4ヶ月頃に行うことが多く、また子どもがそれまで着ていた白小袖から色のある衣服に着替える、色直と呼ばれる儀式も同日に行う場合がありました。



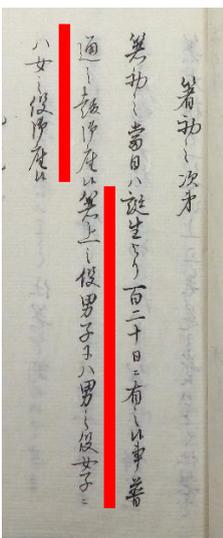
「治姫様坻姫様等御髪置一件等」(16.16-52⑤)

静之介(13代齊泰の子。後に年寄前田土佐守家の養子)の箸初の内容を記した史料。儀式の流れは次の通りです。

①静之介を抱え、その日の吉方へ向ける。②箸役が次之間に来て伺候し、飯の膳をあげ、御礼を言う。③静之介の前に出て、箸を取り、御飯の上に鳥の子をのせた御飯を、御膳の右に置き、御飯を二箸、汁を一箸、また御飯を一箸、次に御菜のうちから一種類を差し上げる。④箸を納め、箸役が復座する。

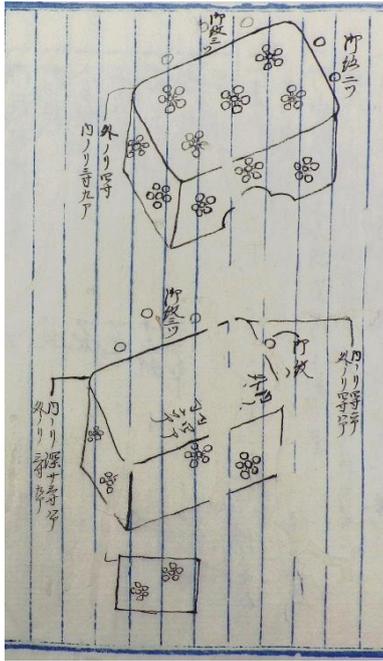
「治姫様坻姫様等御髪置一件等」(16.16-52②)

箸初の儀式の作法を記した史料。「箸上之役」(箸を使い、子どもに食べさせるまねをする者)は、子どもと同性の者が勤めることとされていたことがわかります。



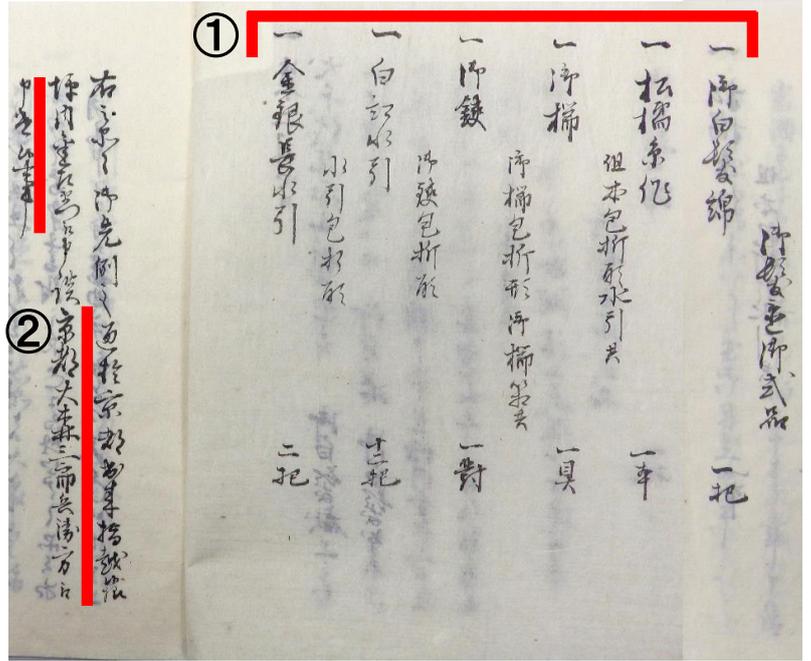
5. 髪置

髪置とは、幼児が髪を初めて伸ばし始める時に、長寿を願い行われる儀式のことです。前田家では、1歳半頃に行うことが多かったようです。



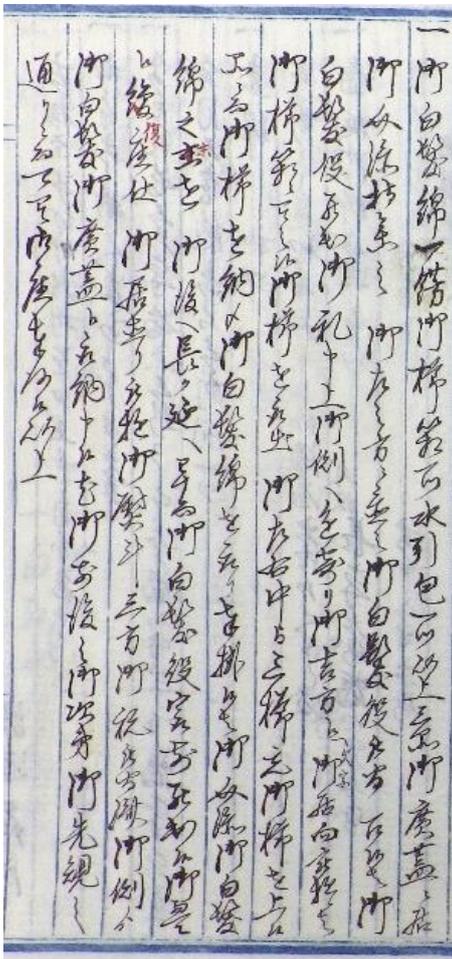
「他亀次郎殿御髪置記録」(16.16-45)

他亀次郎（12代齊広の子）の髪置の儀式で使用した櫛箱の図。櫛箱には、梅鉢の紋が描かれていたことがわかります。

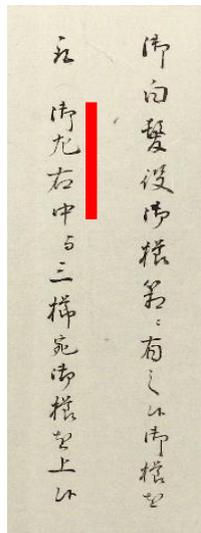


「犬千代丸様御髪置記録」(16.16-46)

14代慶寧の髪置の儀式で使用された品々（①）を書き上げた史料。これらは、京都の御用商人大森三郎兵衛が用意していました（②）。



「亀丸殿御髪置記録」(16.16-48)



〔上左〕茂松の髪置
 〈「治姫様坻姫様等御髪置一件等」(16.16-52⑨)〉



〔上右〕千齡姫の髪置
 〈「治姫様坻姫様等御髪置一件等」(16.16-52⑭)〉

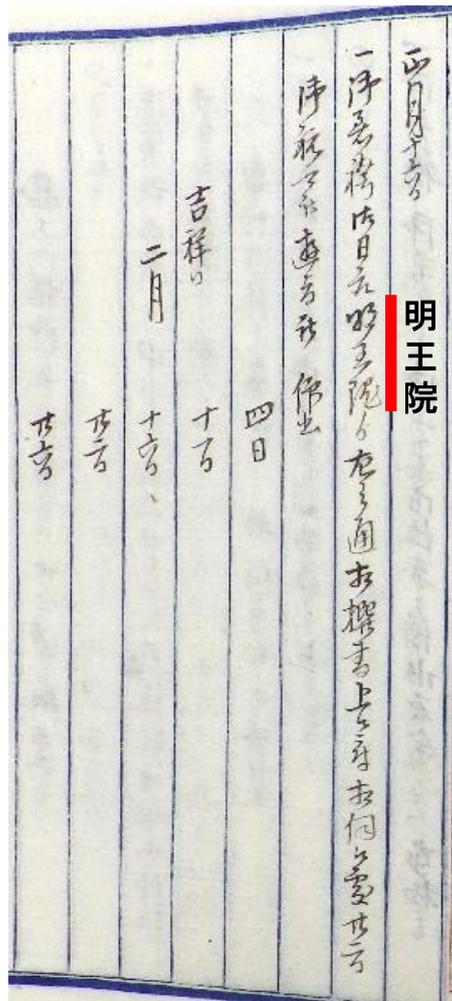
茂松（13代齊泰の子）と千齡姫（13代齊泰の子）の髪置の儀式を比べると、櫛で髪を上げる順番が異なっており、茂松の場合は、左・右・中でしたが、千齡姫の場合は、右・中・左という順であったことがわかります。この違いは、性別によるものと考えられます。

亀丸（13代齊泰の子）の髪置の準備記録が書かれた史料。髪置の儀式の流れは次の通りです。

①介添役が櫛箱などを持ってきて、子どもの左に置く。②白髪役が御礼を言い、子どもの側へ行き、子どもを吉方へ向ける。③白髪役が、櫛箱から櫛を取り出し、子どもの前髪の左・右・中と三櫛ずつ櫛を上げて、その櫛を櫛箱に納める。④白髪綿を取り出し、子どもにかけ、介添役が白髪綿の末を子どもの頭の後へ長く延ばす。⑤白髪役がもとの位置に復座する。⑥白髪綿を広蓋（縁のある盆）に納める。

6. 着袴 ※袴着ともいう

着袴とは、男児に初めて袴をつけさせる儀式のことをいいます。前田家では、5歳頃に行うことが多かったようです。



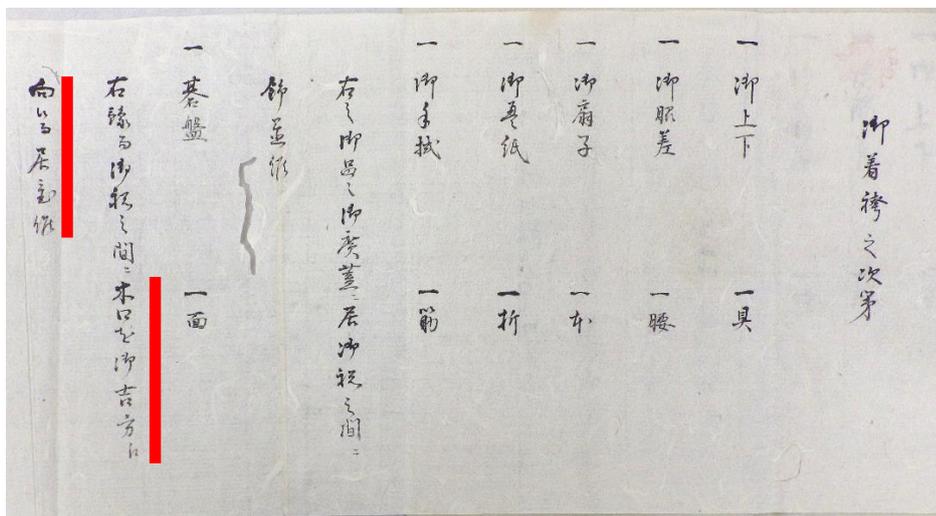
「勝千代様御年表」(16.12-121②)



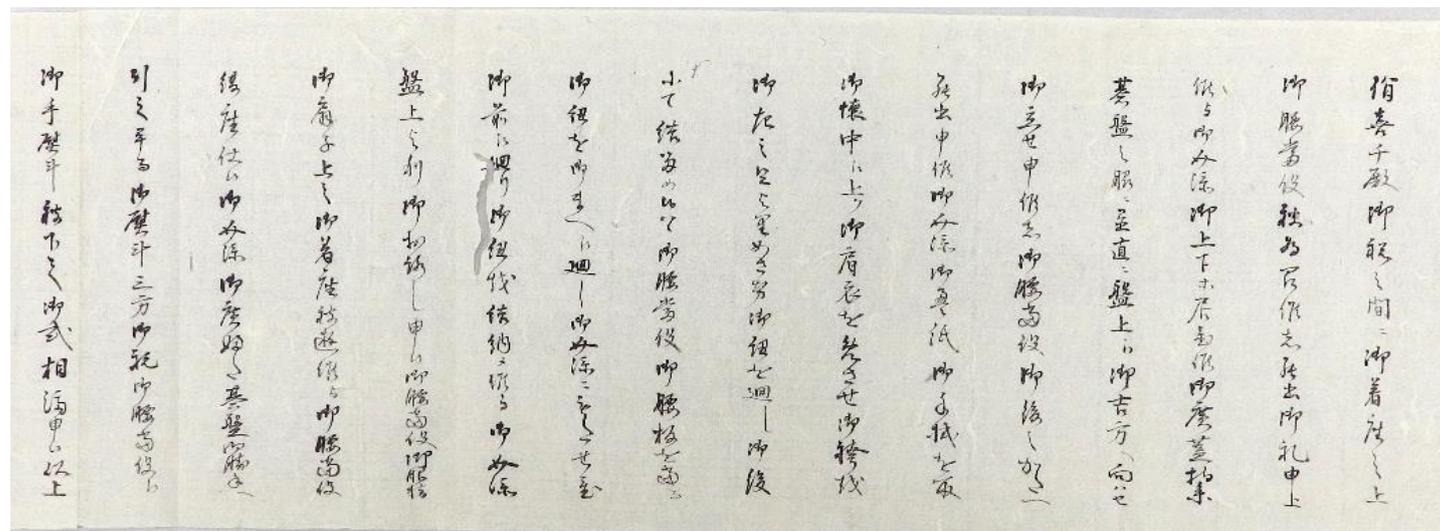
「金府図」(090-585)

〔左〕勝千代（後の13代齊泰。当時5歳）の着袴の儀式では、卯辰山の明王院（左絵図）が日柄のいい日の候補を挙げて、その中から儀式を行う日を22日と決定しました。

〔下〕佾喜千（13代齊泰の子）の着袴の儀式で使用した物や、儀式の流れを記した史料。そのなかには碁盤があり、この上に佾喜千を乗せて儀式を行いました。碁盤は、あらかじめ木口を吉方へ向けて置いていたことが記されています。



〔右・下〕
「治姫様坻姫様等御髪置一件等」
(16.16-52⑩)

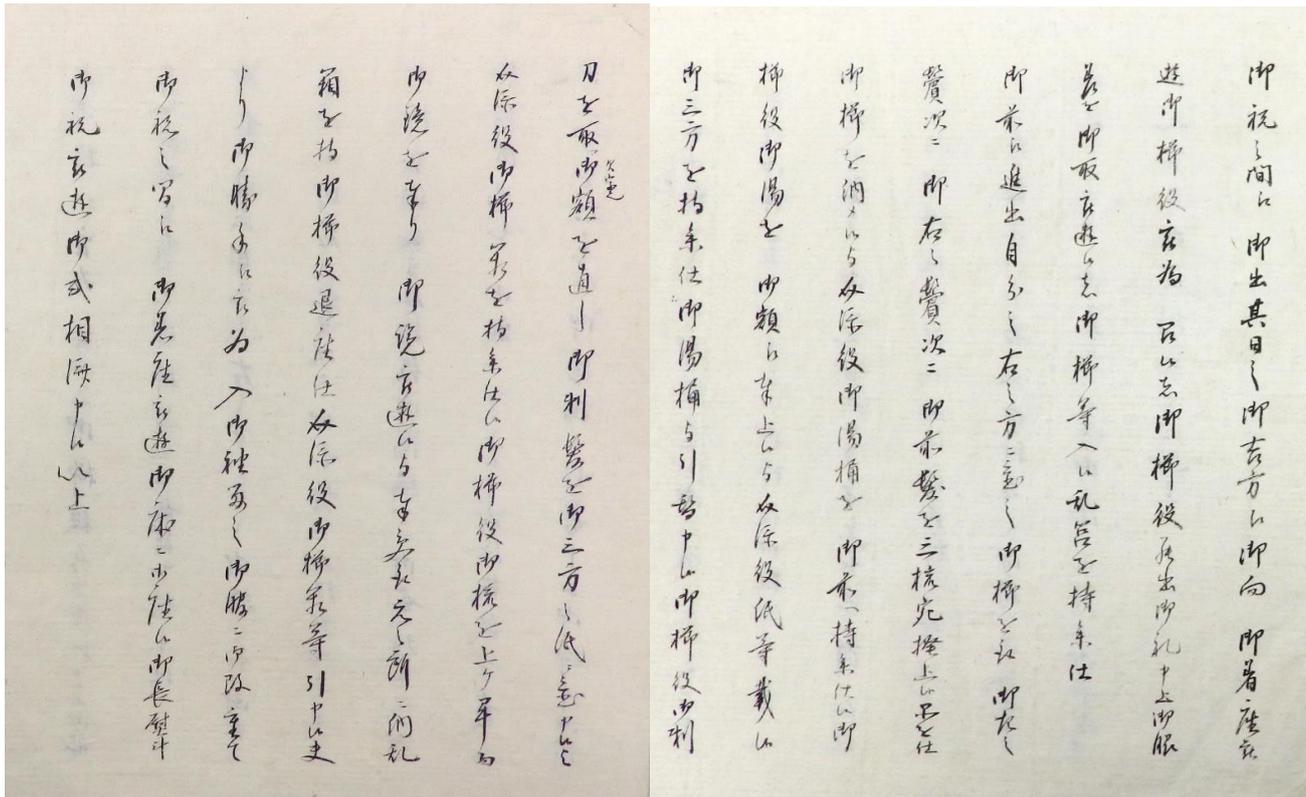


着袴の儀式の流れは、次の通りです。

- ①佾喜千が祝之間に着座し、腰当役も祝之間に出てきて、御礼を言う。
- ②介添役が上下等かみしもの入った広蓋を持ってくる。
- ③佾喜千を碁盤の上に乘せ、吉方へ向けさせ、立たせる。
- ④腰当役が後へ行き、介添役が畳紙・手拭を取り、佾喜千の懐中に入れ、肩衣を着させ、袴を左足から着させる。次に、紐（腰）を通し、後で結ぶ。
- ⑤腰当役が腰板を当て、紐を前に通し、介添役を取らせ、佾喜千の前にまわり、紐を結ぶ。
- ⑥介添役が、佾喜千を盤上からおろし、腰当役が脇差、扇子を子どもに付け、佾喜千が着座する。
- ⑦腰当役も復座する。
- ⑧介添役が広蓋・碁盤を下げて、三方に乗った熨斗を腰当役が御祝として拝領する。

7. 元服

元服とは、それまで着ていた振袖の脇をふさぎ（袖留）、額の角の髪を剃り（角入）、前髪を剃り（前髪執）、改名を行うなどの一連の儀式を指します。これらの儀式は、前田家では15歳頃に行っていました。



「御角入・御袖留御略式之次第」(16.16-57)

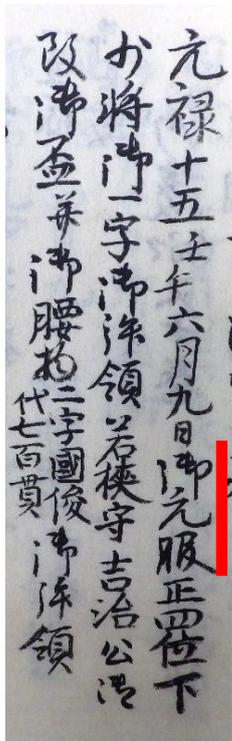
弘化4年（1847）11月4日に行われた喬松丸（13代齊泰の子。当時14歳）の角入・袖留の際に献上されたものの控えて、儀式の作法を記した史料。儀式の流れは、次の通りです。

①祝之間で、子どもをその日の吉方へ向けて着座させる。②櫛役が出てきて、御礼を言い、子どもの脇差を取り、櫛などが入った乱箱（髪道具を入れた箱）を持ち子どもの前へ進む。③櫛役が、子どもの左の鬢、右の鬢、前髪を3回ずつ搔き上げる。④これを終え、櫛役が櫛を納める。⑤介添役が御湯桶を子どもの前まで持ってくる。⑥櫛役が御湯を子どもの額につける。⑦介添役が紙などをのせた三方を持ってきて、御湯桶と引き替える。⑧櫛役が剃刀を取り、子どもの額の角の髪を剃り、その髪を三方の紙の上に置く。⑨介添役が櫛箱を持って、櫛役が櫛を渡す。⑩子どもが鏡で自分の額を見る。⑪櫛役が鏡を受け取り、乱箱を持ち、退座する。⑫介添役が櫛箱を下げる。⑬子どもが袖留の服に着替え、祝之間で長熨斗祝を行う。

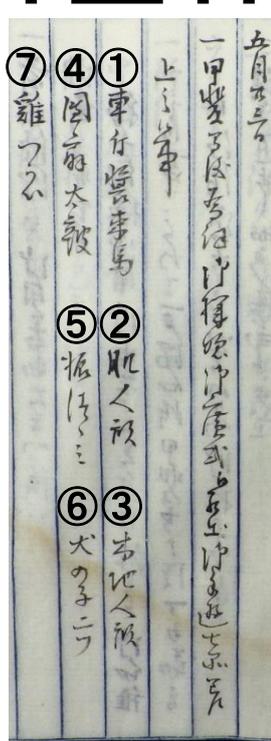
補足

子どもはどのような物で遊んでいたのか？

子どもが元服するまでには様々な儀式・諸行事が行われましたが、日常生活はどのようなものだったのでしょうか。左の史料には、文化9年（1812）5月23日に、勝千代様御用主附の年寄長連愛から勝千代（後の13代齊泰。当時2歳）へ①車付装束馬、②肌人形、③木地人形、④団扇太鼓、⑤振つゝミ（振鼓）、⑥犬の子二ツ、⑦鶏つかい（つがいの鶏のこと）が献上されたことが書かれています。①は子どもがまたぐことができる馬の形をした車輪付のもの、②③は字の通り人形、④⑤は太鼓、⑥⑦は土で作られた犬と鶏ではないかと考えられます。こうした物で、子どもたちは遊んでいたのかもしれない。



「御代々様并御連枝様方御略譜」(16.11-53)



「勝千代様御年表」(16.12-121①)

左の史料は、元禄15年（1702）6月9日に6代吉徳が初めて将軍に御目見した際のことを書き上げたものです（当時13歳）。嫡子の場合は、袖留や前髪執の儀式を行う前に、江戸城において将軍に御目見し、任官したり、腰物などを拝領したりしており、史料のようにそれを「元服」という場合もありました。なお、その後、吉徳は元禄16年12月に袖留、宝永元年（1704）12月に前髪執を行いました。